



▲学都について考えたシンポジウム



▲学都を担う学生たちとともに

岡山大学地域総合研究センターは11月6日、フランス・ストラスブールの事例を基に大学と地域の協働のまちづくりを学ぶ「第1回国際学都シンポジウム」学都とは何か?—ストラスブールの挑戦—を、創立五十周年記念館で開催した。

岡山大学では森田潔学長が「学都岡山」構想を提唱しており、同センターが中心となり学都モデルとしてストラスブールを研究している。

シンポジウムでは、ストラスブールのロベルト・ヘルマン第一助役が基調講演。都市と大学が一体となったまちづくりを行いながら経済戦略においても協働し、都市全体

の成長を目指していることを紹介した。ストラスブール政治学院のシルヴァン・シルマン院長も講演し、欧州公共行政連合の設立を通じて、国・地方公共団体・高等教育機関の連携による人材養成が実現していると説明した。

講演後は荒木勝理事（社会貢献・国際担当）を進行役に、「ストラスブールのまちづくり」の著者であるヴァンソン藤井由実さんを交えて、ヘルマン氏、シルマン氏が会場の参加者と対話し、「学都」を実現させるまちづくりの方策について考えた。

TOPICS 2

Okayama University

大学と地域の協働とは 「第1回国際学都シンポジウム」開催

TOPICS 3

Okayama University

肺移植100例を達成 岡山大学病院が国内初

岡山大学病院で11月12日、脳死移植を含め100例目となる肺移植手術が行われ、無事成功した。1998年に同病院が日本初の肺移植となる生体部分肺移植に成功して以降、100例達成は国内の医療機関初、最速となる。

今回の手術は、閉塞性細気管支炎の10歳代男性に対し、ドナー（臓器提供者）である母親の右片肺を移植する生体肺移植。呼吸器外科（三好新一郎教授）が担当となり、同科肺移植チームの大藤剛宏准教授が執



▲100例目の肺移植手術の様子=11月12日

刀。総勢約30人の手術チームで午前10時半に手術を開始し、約6時間後の午後4時38分に終了した。

同病院ではその後も肺移植が行われ、12月2日現在で脳死肺移植41例、生体肺移植61例の102例を実施。手術後の5年生存率は82%で、世界平均の50%（国際心肺移植学会データ）を大きく上回る。100例目の手術後に会見した三好教授と大藤准教授は「100例は通過点の一つ。今後も移植医療を推進したい」と述べた。



トークショーを行う東川氏▶



◀ピブリアバトル



TOPICS 1

Okayama University

母校との絆を再確認 ホームカミングデイ2012開催

岡山大学は10月20日、卒業生を招いて大学との絆を深めてもらうイベント「ホームカミングデイ2012」を開催した。訪れた卒業生たちは旧友や恩師と思い出話を花を咲かせ、現役学生と交流するなど、懐かしい母校でのひとときを楽しんだ。

メイン会場の創立五十周年記念館では、卒業生ら約200人を迎え歓迎式典と全学同窓会総会を開催。特別企画として、法学部卒業生であり、「謎解きはディナーのあとで」で第8回本屋大賞を受賞した作家・東川篤哉氏によるトークショーも行われ、大学時代や執筆中のエピソードなどが披露された。東川氏や学生、教職員が推薦本を紹介し合う「ピブリアバトル」もあり、会場は大いに盛り上がった。

記念館周辺では、飲食店など



▲卒業生の店



▲卒業生による陶芸作品の展示販売

を運営する卒業生らが、出張出店。陶芸や木工作品などを専門とする工芸研究室卒業生・在学生の作品展示やワークショップも行われた。施設公開や教員・卒業生による講演会、半田山森林散策ツアーなど学部ごとのイベントも開催。応援団総部や「うらじゃ」チームの演舞、茶道部によるお茶席、学生ガイドによるキャンパスウォークツアーなどもあり、多くの現役学生が卒業生らを歓迎した。

ホームカミングデイは来年も開催予定。さまざまなイベントが企画されますので、卒業生だけでなく、現役学生、地域の方、岡山大学志望の高校生など多数のご参加をお待ちしております！